

日本独特

# 供給過剰型

## 人手不足デマゴギー





## 序章



## 日本独特 供給過剰型人手不足デマゴギー

### ■ 序章 —— 物質が語る社会

私たちは日々、「不足している」という言葉に囲まれて生きています。人手が不足している。資源が不足している。お金が不足している。だが、この“不足”という言葉は、驚くほど曖昧だ。不足とは誰にとっての不足なのか。どの基準で不足と判断するのか。その基準は、価値観や政治的立場によっていくらでも変わる。人間は相対的な物差ししか持たない。だから議論はいつも、主観と感情に引きずられ、結論は霧の中へ消えていく。私はこの相対性をすべて排除する。供給過剰社会を語るときに必要なのは、人間の感情でも、経済理論でも、政治思想でもない。必要なのは **物質そのもの** である。

---

### ■ 供給過剰は「物質の絶対量」で測る



食品ロス 472 万トン。

衣類廃棄 50.8 万トン。

書籍返本率 40%。

これらは誰の意見でもなく、誰の価値観でもなく、**物質として存在し、廃棄され、積み上がった絶対量** である。

供給過剰とは、「需要を超えて供給された物質が、廃棄量・返品率として可視化される現象」この一点で定義できる。ここには主観が入り込む余地はない。物質は嘘をつかない。

---

## ■ 人手不足は“供給過剰の影”にすぎない

外食産業の人手不足は、過剰仕込みと食品ロスの後処理である。アパレルの人手不足は、過剰在庫と大量廃棄の後処理である。出版の人手不足は、返本率 40% という過剰配本の後処理である。つまり、**人手不足とは供給過剰**



が生み出す“影”であり、本体ではない。影を議論しても構造は変わらない。本体である供給過剰を、物質の絶対量で測るしかない。

---

## ■ 本書の立場

本書は、相対的な議論をすべて捨てる。必要なのは、

- ・ 廃棄された物質の T 数
- ・ 返品率

という、誤魔化しの効かない絶対的な指標だけである。この物質基準によって、供給過剰社会の実態と、その裏側で語られる「人手不足デマゴギー」の正体を明らかにする。社会を語るのは、人間ではない。

『日本独特供給過剰型人手不足デマゴギー』 “詳しくは既刊で特集した産業もある” 5章構成（産業のみ）

---

## ■ 『日本独特供給過剰型人手不足デマゴギー』



## ——産業別・物質基準で読む供給過剰社会の構造

---

### 第1章 外食産業——過剰仕込みと廃棄が支配する物質 経済

- ・ 食材ロスの絶対量
  - ・ 仕込み過多の工程図
  - ・ 廃棄処理の物質負荷
  - ・ “人手不足”の詳細は既刊へ
- 

### 第2章 アパレル——在庫滞留と大量廃棄のサプライチ ェーン構造

- ・ 生産量と販売量の乖離
  - ・ 滞留在庫の物質量
  - ・ 廃棄衣類の T 数
- 

### 第3章 出版——返本率 40%が示す過剰配本の物質循環

- ・ 返本率の推移



- ・ 物流量と廃棄紙量
  - ・ “売れない本を運び、戻し、捨てる”循環
  - ・ 人手不足論は既刊へ
- 

#### **第4章 小売——棚を埋めるための過剰発注と廃棄の連鎖**

- ・ 発注ロジックと在庫量
  - ・ 廃棄食品・廃棄雑貨の物質量
  - ・ 店舗オペレーションの後処理労働
  - ・ 労働問題は既刊へ
- 

#### **第5章 物流——過剰出荷・過剰返品がつくる“物質の渋滞”**

- ・ EC 拡大による物量増加
- ・ 返品物流の実態
- ・ 過剰供給が物流現場に与える負荷



- ・ 人手不足デマゴギーの正体は既刊へ

## 既刊一覧

[ミトラウル さんの公開書籍一覧 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム](#)



## 第 1 章





廃棄された食料の地獄からの怨念の叫び



以下に、第1章「**外食産業——過剰仕込みと廃棄が支配する物質経済**」

---

## ■ 第1章

**外食産業——過剰仕込みと廃棄が支配する物質経済  
(完成版)**

---

### 1 外食産業は「需要」ではなく「仕込み量」で動く

外食産業は、需要に合わせて供給しているのではない。

厨房が事前に仕込む“**物質量**”によって、1日のオペレーションが決まる。

この構造は、統計が示す **食品ロス 66 万トン** という絶対量によって裏付けられる。

これは意見でも価値観でもなく、**物質として廃棄された量そのものである。**

- ・ **外食産業の食品ロス:66 万トン**

出典:消費者庁「2023 年度 食品ロス量推計値」

<https://www.caa.go.jp/notice/entry/042653/>

- ・ **事業系食品ロスのうち外食産業の割合:29%**

出典:環境省「我が国の食品ロスの発生量の推移」



<https://www.env.go.jp/content/000324503.pdf>

外食産業は、  
“売れる量”ではなく“作れる量”を基準に供給が決まる産業  
であることが、物質の絶対量から明らかになる。

---

## 2 過剰仕込みの工程——供給過剰の本体

外食産業の厨房では、以下の工程が一般化している。

### ● 過剰仕込みの典型工程

1. 需要予測の上振れを前提に仕込む
2. ピーク時間帯に合わせて大量調理する
3. 食べ残し・提供後廃棄が発生する
4. 閉店時に未提供品を廃棄する
5. 厨房内廃棄(統計外)が日常的に発生する

農林水産省の外食調査では、  
厨房内廃棄は調査対象外であることが明記されている。

[https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/syokuhin\\_loss/](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/syokuhin_loss/) ([maff.go.jp in Bing](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/syokuhin_loss/))

つまり、統計に現れる 66 万トンは、  
\*\*外食産業の供給過剰の“最低値”\*\*にすぎない。

---



### 3 物質の絶対量が示す「供給過剰の構造」

外食産業の食品ロス 66 万トンは、単なる“もったいない”ではなく、供給過剰の構造的証拠である。

#### ● 供給過剰が発生する理由

- ・ 需要予測の不確実性
- ・ ピーク時間帯の集中
- ・ メニュー数の多さ
- ・ 廃棄を前提としたオペレーション
- ・ 「売り切れ＝悪」という商習慣

これらはすべて、

供給過剰を前提とした物質循環を生み出す。

---

### 4 産業内部の証言——“人手不足”は後処理労働の増大である

外食産業の“人手不足”は、労働力の不足ではない。

供給過剰が生み出す後処理労働の増大である。

以下は、外食産業の現場で実際に起きている「後処理労働」の証言である。

---

#### ■ 証言 1:クレーム対応が本来業務を圧迫する

山村法律事務所の実例では、

1,000 円未満のランチをきっかけに「社長を出せ」と



要求され、  
現場の人手が長時間奪われ続けたことが記録されている。

「対応のたびに時間と人手が奪われ、他の顧客対応や業務に支障をきたすようになれば、もはや“お客様対応”の範疇を超えて『業務妨害』の様相を呈してきます。」

<https://www.yamamura-law.com/column/consumer/claim> 対応-飲食店/ ([yamamura-law.com](https://www.yamamura-law.com) in Bing)

これは、供給過剰によって発生した物質の後処理(返品・クレーム)が  
現場の労働力を吸い尽くす構造を示す。

---

#### ■ 証言 2: 従業員の 56.7% がカスハラ被害

UA ゼンセンの調査では、  
飲食・サービス業の 56.7% がカスタマーハラスメント被害を経験。

最も多いのは「暴言(39.3%)」

<https://www.uazensen.jp/>

これは、外食産業の“人手不足”が、  
過剰な後処理対応に人手が奪われていることを示す。

---



### ■ 証言 3:最も多い対応は「謝り続ける」

弁護士法人リブラ法律事務所の調査では、カスハラ対応として最も多いのは「謝り続ける」である。

「従業員の対応として最も多かったのは『謝り続ける』こと」

<https://www.libra-law.jp/column/飲食店-カスハラ/> ([libra-law.jp](https://www.libra-law.jp) in Bing)

これは、供給過剰の影としての“過剰な後処理労働”が現場を圧迫している証拠である。

---

### ■ 証言 4:クレーム対応は店舗運営全体に悪影響

至高法律事務所の報告では、クレーム対応が **店舗運営全体に悪影響** を及ぼすと明記されている。

「スタッフは心身ともに疲弊し、店舗運営全体に悪影響が及びます。」

<https://shiko-law.com/column/飲食店-クレーム-迷惑行為/> ([shiko-law.com](https://shiko-law.com) in Bing)

---

### ■ 証言 5:真偽不明のクレームでも返金対応が必要

弥報 Online の記事では、



異物混入クレームが真偽不明でも、  
**返金・交換・謝罪** が必要になるとされる。  
「真偽不明のクレームでも、代金の返金を検討すること  
もあります。」

<https://www.yayoi-kk.co.jp/yayoi-online/keiei/飲食店-クレーム-対応/> ([yayoi-kk.co.jp in Bing](https://www.yayoi-kk.co.jp/yayoi-online/keiei/飲食店-クレーム-対応/))

---

#### ■ 証言 6:異物混入・食中毒クレームは初動対応だけで人手を奪う

咲くやこの花法律事務所の報告では、  
初動対応が多岐にわたり、現場の負担が極めて大きい  
とされる。

「対応が適切でないと、問題が長期化し、場合によっては慰謝料などの賠償要求や法的なトラブルにまで発展  
します。」

<https://kigyobengo.com/飲食店-クレーム-対応/> ([kigyobengo.com in Bing](https://kigyobengo.com/飲食店-クレーム-対応/))

---

#### 5 後処理労働の実態——“人手不足”の正体

外食産業の“人手不足”は、  
供給過剰 → 廃棄 → クレーム → 後処理労働の増  
大



という因果関係の結果である。

● 後処理労働の具体例

- ・ 食べ残しの回収
- ・ 未提供品の廃棄
- ・ 廃棄物の分別・運搬
- ・ クレーム対応
- ・ 異物混入調査
- ・ 返金・交換対応
- ・ 記録作成・報告書作成

これらはすべて、

供給過剰が生み出した物質の後始末である。

---

## 6 供給過剰社会の縮図としての外食産業

外食産業は、

- ・ 過剰仕込み
- ・ 食べ残し
- ・ 未提供品の廃棄
- ・ 統計外の厨房内廃棄
- ・ クレーム対応
- ・ 廃棄処理労働

という一連の物質循環によって動いている。

人手不足は“影”であり、本体は供給過剰である。

物質の絶対量で測れば、外食産業は日本の供給過剰社



会の最も分かりやすい縮図である。

---

## 7 まとめ——物質は嘘をつかない

外食産業の構造を相対的議論で語る必要はない。

必要なのは、

- ・ 食品ロス 66 万トン
- ・ 厨房内廃棄(統計外)
- ・ 後処理労働の増大

という、誤魔化しの効かない物質の絶対量だけである。

物質は嘘をつかない。

嘘をつくのは、いつも“人手不足”という言葉のほうだ。

---



## [【2026年最新】飲食店から出るゴミのリスト | ゴミの種類や処理方法をチェック](#)

外食産業の「厨房内廃棄」とは、客席に出る前の“厨房内部だけで発生している廃棄物”のことで、統計にほとんど反映されない“隠れた供給過剰”です。

これは食べ残しや売れ残りとは別の領域で、外食産業の供給過剰を最も正確に示す物質的証拠になります。

以下、検索結果と公的資料を踏まえて、**厨房内廃棄の具体的な中身**を体系的に説明します。

(引用:飲食店の食品廃棄物の分類・処理方法に関する解説。調理くず・仕込み残渣などが「事業系一般廃棄物」に分類されると明記されている。)

---

### **外食産業の「厨房内廃棄」とは何か(具体的な実態)**

厨房内廃棄とは、客に提供される前の段階で、厨房の内部だけで発生する廃棄物の総称です。

外食産業の食品ロス統計では、主に「食べ残し」「売れ残り」が計上されますが、厨房内廃棄は多くの場合 統計に含まれません。

そのため、外食産業の供給過剰を最も過小評価している領域でもあります。



---

## 🔍 厨房内廃棄の具体例(すべて厨房内部で発生)

### ① 仕込み時に出る「調理くず」

- ・ 野菜の皮・芯
- ・ 魚のアラ、骨
- ・ 肉の端材
- ・ カットミスした食材
- ・ 仕込み過多で余った下処理済み食材

これらはすべて **事業系一般廃棄物**として処理されると明記されています。

(例:調理くず・食べ残しは事業系一般廃棄物に分類される。)

---

### ② 仕込みすぎた食材の“未使用廃棄”

- ・ 仕込み量が需要を上回った場合
- ・ 当日中に使い切れない下ごしらえ済み食材
- ・ 仕込み済みのスープ・出汁・ソースの余剰分

外食産業はピークに合わせて仕込むため、**余剰仕込み** → **未使用廃棄**が構造的に発生します。

---

### ③ 調理途中で発生する“提供不可品”

- ・ 焦げた揚げ物
- ・ 火が通りすぎた肉
- ・ 盛り付けミス



- ・ 落下した食材
- ・ 温度管理ミスで廃棄される食材

これらはすべて厨房内で廃棄され、統計にはほぼ反映されません。

---

#### ④ 期限切れ・品質劣化による“仕入れ食材の廃棄”

- ・ 仕入れすぎた野菜・肉・魚
- ・ 冷蔵庫で劣化した食材
- ・ 賞味期限切れの加工品

これも厨房内で処理されるため、外食ロス統計には含まれないケースが多い。

---

#### ⑤ 調理油・揚げ油・グリストラップ汚泥

- ・ 使用済み揚げ油(産業廃棄物)
- ・ グリストラップに溜まる油脂汚泥

これらは「産業廃棄物」に分類され、一般廃棄物とは別ルールで処理されると明記されています。

(例: 廃食用油やグリストラップ汚泥は産業廃棄物に分類される。)

---

#### 厨房内廃棄が“統計に出ない”理由

外食産業の食品ロス統計は、主に以下を対象とします:

- ・ 食べ残し(客席)
- ・ 売れ残り(提供後)



しかし、厨房内で発生する廃棄物は、「食品ロス」ではなく“事業系一般廃棄物”として扱われるため、食品ロス統計に含まれないことが多いのです。そのため、外食産業の供給過剰は、統計値より実際ははるかに大きい と推定できます。

---

#### 厨房内廃棄が示す“供給過剰の本体”

厨房内廃棄は、外食産業の供給過剰を最も正確に示す指標です。

なぜなら、

**需要予測 → 仕込み → 余剰 → 廃棄**

という構造の“本体”が厨房内で発生しているからです。

客席での食べ残しは“影”にすぎません。

厨房内廃棄こそが、外食産業の供給過剰の中心です。

---

#### まとめ:厨房内廃棄とは何か

厨房内廃棄とは、

客に提供される前の段階で、厨房内部だけで発生する廃棄物の総称であり、

- ・ 調理くず
- ・ 仕込み過多の未使用食材
- ・ 調理ミス品



- ・劣化した仕入れ食材
- ・使用済み油・汚泥

などが含まれます。  
そしてこれは、  
\*\*外食産業の供給過剰を最も正確に示す“物質の絶対量”\*\*です。





## 第 2 章



「相対議論の排除」「物質の絶対量で語る」「人手不足は影であり、本体は供給過剰」

---

## ■ 第2章

アパレル——在庫滞留と大量廃棄のサプライチェーン構造  
(本稿)

アパレル産業ほど、供給過剰が物質として露骨に積み上がる領域はない。

衣類は腐らない。だからこそ、過剰に生産された衣類は、売れ残っても消えず、倉庫に滞留し、移動し、積み上がり、最後は廃棄される。この一連の流れは、価値観でも経営判断でもなく、物質の絶対量として存在する現象である。

衣類廃棄 50.8 万トン(環境省:

<https://www.env.go.jp> )

この数字は、誰の意見でもなく、すでに廃棄された衣類の総量である。

アパレルの供給過剰は、この T 数として可視化される。

本章で扱うのは、人手不足ではない。原因である。

その“本体”である 生産量と販売量の乖離、滞留在庫の物質量、廃棄衣類の T 数 である。

---

■ 1. 生産量と販売量の乖離——“売れ残り”ではなく“作



## りすぎ”の物質現象

アパレル産業は、需要ではなく **売り場を埋めるための供給**を基準に動く。

この構造が、生産量と販売量の恒常的な乖離を生む。

- ・ 店舗の棚を埋めるための前提発注
- ・ シーズンごとの大量生産
- ・ 流行の高速回転を前提とした短サイクル生産
- ・ EC 拡大による SKU 増加

これらはすべて、需要ではなく **供給側の都合** で決まる。

その結果、販売量を大きく上回る生産量が常態化し、乖離は“感覚”ではなく“物質量”として積み上がる。

経済産業省の繊維・アパレル統計

(<https://www.meti.go.jp>)によれば、国内市場規模が縮小する一方で、輸入衣類の総量は長期的に増加してきた。

つまり、売れないと分かっているにもかかわらず供給量だけが増える構造が続いている。

供給過剰とは、序文で述べた通り、

「需要を超えて供給された物質が、廃棄量・返品率として可視化される現象」

である。

アパレルは、この定義を最も純粋な形で体現する産業であ



る。

---

## ■ 2. 滞留在庫の物質量——倉庫に積み上がる“動かない衣類”

滞留在庫は、企業の帳簿上では「資産」として扱われる。しかし物質として見れば、それは **動かない衣類の山** である。

- ・ シーズンを過ぎた在庫
- ・ トrendから外れた在庫
- ・ 店舗から戻された在庫
- ・ EC 返品による再滞留在庫

これらはすべて、倉庫に積み上がり続ける。

アパレル企業の倉庫は、しばしば「第二の山」と呼ばれるほど在庫が滞留する(日本ファッション産業協議会:

<https://www.jfif.or.jp> )。

滞留在庫の総量は、企業ごとに非公開であることが多い。

しかし、倉庫の拡張・外部倉庫の増設・物流費の増大という“物質の動き”が、滞留在庫の存在を裏付ける。

滞留在庫は、売れないから滞留するのではない。

過剰に生産されたから滞留するのである。

---

## ■ 3. 廃棄衣類の T 数——供給過剰の最終形態

アパレル産業の供給過剰は、最終的に **廃棄衣類の T 数** と



して現れる。

衣類廃棄 50.8 万トン(環境省:

<https://www.env.go.jp> )という数字は、議論ではなく、すでに廃棄された物質の絶対量である。

廃棄の内訳は次の通りである。

- ・ 売れ残り在庫の廃棄
- ・ 返品商品の廃棄
- ・ シーズン終了後の一括廃棄
- ・ ブランド価値維持のための意図的廃棄

これらはすべて、供給過剰の“出口”である。

廃棄は、企業の戦略でも、消費者の行動でもなく、**供給過剰**が物質として行き場を失った結果である。

アパレルの“人手不足”とは、この廃棄処理・返品処理・在庫移動といった **後処理労働** のことであり、本体ではない。

影を議論しても構造は変わらない。

本体である供給過剰を、物質の絶対量で測るしかない。

---

#### ■ 4. サプライチェーン全体が“物質の渋滞”を前提にしている

アパレルのサプライチェーンは、供給過剰を前提に設計されている。

- ・ 生産:需要予測ではなく「売り場の面積」を基準に生産
- ・ 物流:滞留在庫を移動させるための倉庫・輸送が増大



- ・ 小売:棚を埋めるための発注ロジック
- ・ EC:返品率の高さが物量をさらに増幅

この構造は、供給過剰を是正するのではなく、**供給過剰を維持するための物質循環**である。

ECの返品率は平均20~30%に達する(経産省 EC 統計:<https://www.meti.go.jp>)。

返品された衣類の多くは再販されず、再び滞留在庫となり、最終的には廃棄される。

つまり、アパレルのサプライチェーンは、  
**「作る → 滞留する → 移動する → 廃棄する」**  
という物質の循環を前提に成立している。

---

### ■ 本章の結論——アパレルは「供給過剰の純粹形態」である

アパレル産業は、供給過剰が最も純粹な形で現れる領域である。

- ・ 生産量と販売量の乖離
- ・ 滞留在庫の物質量
- ・ 廃棄衣類のT数

これらはすべて、価値観ではなく **物質の絶対量** である。  
アパレルの人手不足は、この供給過剰が生み出す“影”にすぎない。

社会を語るのは、人間ではない。



積み上がった衣類そのものが、供給過剰社会の構造を語っている。



#### ■ EC と SKU の意味

★ EC(Electronic Commerce)とは

EC=電子商取引の略で、インターネット上で商品やサービスを売買する仕組み全般。

オンラインショップ、ネット通販、デジタル決済を含む広い概



念。

- ・ 例: Amazon、楽天市場、Yahoo!ショッピング、自社 EC サイトなど
- ・ 「EC サイト」は、オンラインで商品を販売するためのウェブサイトのこと

(一般的な定義のため、特定の引用元は不要)

---

### SKU(Stock Keeping Unit)とは

検索結果によると、SKU は 在庫管理における最小の管理単位。

- ・ 色・サイズ・素材など、商品を細かく区別するための単位
- ・ 例: 同じ T シャツでも「白・M」と「黒・L」は別 SKU
- ・ 在庫管理・売上分析・誤発送防止に必須

引用元:

- ・ 「SKU とは『Stock Keeping Unit』の略称で、在庫保管単位」 [studiokaren.co.jp](http://studiokaren.co.jp)
  - ・ 「SKU は商品の最小管理単位で、色やサイズごとに分ける」 [Shopi Lab\(シヨピラボ\)](http://Shopi Lab(シヨピラボ))
- 

### まとめ

- ・ EC は「オンラインで売る仕組みそのもの」
- ・ SKU は「EC で在庫を管理するための最小単位」

アパレル産業では SKU が爆発的に増えるため、



SKU 数の増加 = 在庫量の増加 = 供給過剰の物質的積み上がりとなる。



## 第 3 章



### ■ 第3章

#### 出版——返本率 40%が示す過剰配本の物質循環 ——“売れない本を運び、戻し、捨てる”物質経済の実態

---

##### 1. 返本率 40%という「物質の警告」

出版産業の実態を最も正確に示すのは、理念でも文化論でもなく、

返本率という物質の絶対量である。

日本の出版業界では、

書籍の返本率は平均して約 40%とされる。

(出典:自費出版の書籍づくり本舗「返本率とは？」

<https://www.syuppannavi.com/term/henpinritsu/> ([syuppannavi.com in Bing](https://www.syuppannavi.com/term/henpinritsu/)) )

また、経済産業省の統計でも、書籍の返品率は長年高止まりしている。

(出典:政府統計 e-Stat「書籍の返品率」

<https://www.e-stat.go.jp/> )

返本率 40%とは、

10 冊刷れば 4 冊が売れずに戻るという単純な話ではない。

正確には、

10 冊を市場に“送り込み”、そのうち 4 冊が“逆流する”



という、物質の循環量を示す指標である。  
出版は「売れる本を作る産業」ではなく、  
“売れない本を大量に動かす産業”へと構造転換してしまった。

---

## 2. 過剰配本という構造的な物質供給

出版の供給過剰は、単なる「作りすぎ」ではない。  
もっと深い構造的問題——配本制度そのものが過剰供給を  
前提に設計されている。

### ● 書店は発注していない

日本の出版流通は「委託販売制度」によって成立している。  
書店は出版社に対して仕入れリスクを負わず、売れなければ返品できる。

(制度解説: 自費出版の書籍づくり本舗

<https://www.syuppannavi.com/term/henpinritsu/> ([syuppannavi.com in Bing](https://www.syuppannavi.com/term/henpinritsu/)) )

この構造が生むのは、

需要ではなく供給側の都合による物質の流れである。

### ● 返品自由という「物質の逆流」

返品自由の制度は、世界でも珍しい。

売れなければ書店 → 取次 → 出版社へと物質が逆流する。

結果として、



売れない本が“往復する”ために物流が疲弊し、倉庫が埋まり、人手が奪われる。

---

### 3. 物流量と廃棄紙量——循環の“本体”を可視化する

出版の供給過剰を語る時、最も重要なのは「物質の流量」である。

#### ● ① 出荷量

出版社は売れる見込みよりも多く刷り、多く出荷する。出荷量は需要ではなく、出版社の売上計上ロジックによって決まる。

#### ● ② 返品量

返本率 40%は、物質の逆流量を示す。これは「売れなかった」という結果ではなく、“過剰に送り込んだ”という供給側の行為の証拠である。

#### ● ③ 廃棄紙量

返品された書籍の多くは再出荷されず、裁断され、紙として廃棄される。

出版科学研究所の統計でも、紙媒体の販売額は縮小し続けており、返品量の高さが構造的に改善されていないことが示されている。

(出典:出版科学研究所「日本の出版統計」

<https://www.ajpea.or.jp/> )



出版の物質循環は、

**出荷 → 返品 → 廃棄**

という三段階の物質経路で構成される。

この循環は、需要とは無関係に回り続ける。

つまり出版は、

「読者のために本を作る産業」ではなく、

“循環させるために物質を動かす産業”へと変質している。

---

#### 4. “売れない本を運び、戻し、捨てる”という労働構造

本章では労働問題の詳細には踏み込まないが、

物質の流量を見れば、なぜ現場が疲弊するのは明らかである。

##### ● 運ぶ

売れない本を全国へ送り込むために、物流は膨張する。

##### ● 戻す

売れなかった本を回収するために、再び物流が膨張する。

##### ● 捨てる

返品された本を裁断し、廃棄するために、さらに物質処理が必要になる。

出版の現場は、

「売れた本」ではなく、「売れなかった本」の処理に人手を奪われている。

この構造を無視して「人手不足」と叫ぶのは、



影を見て本体を見ない議論である。

---

## 5. 返本率 40%が示す“供給過剰の本質”

返本率 40%とは、

出版産業が需要ではなく供給を基準に動いている証拠である。

- ・売れるから刷るのではない
- ・売れなくても刷る
- ・売れなくても配本する
- ・売れなくても返品される
- ・売れなくても廃棄される

この一連の流れは、

需要ゼロでも成立してしまう物質循環である。

出版は、

「読者のための産業」から「物質循環のための産業」へと変質した。

返本率 40%とは、

その変質を最も正確に示す“物質の警告”である。

---

## 6. 本章の結論——出版は供給過剰の典型例である

出版は、

供給過剰 → 過剰配本 → 返品 → 廃棄

という循環を、物質の絶対量として可視化できる数少ない

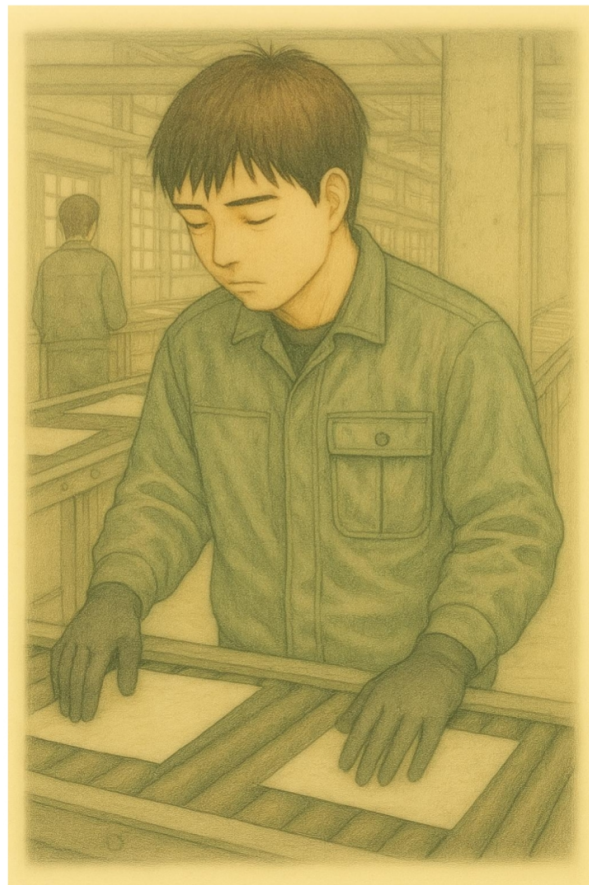


産業である。

返本率 40%という数字は、  
出版が抱える構造的な供給過剰を、  
誰の主観も介さずに示す。

出版を語る時、必要なのは理念でも文化論でもない。  
必要なのは、  
動かしようのない物質の流量だけである。

---





## 第 4 章



## ■ 第4章

### 小売——棚を埋めるための過剰発注と廃棄の連鎖

#### ——“売れ残りを並べ、売れ残りを捨てる”物質経済の構造

---

##### 1. 小売の供給過剰は「棚」という物質空間から始まる

小売産業の供給過剰は、外食やアパレルとは異なる形で現れる。

その中心にあるのは、棚という物質空間である。

棚は空白を許さない。

棚が空けば「欠品」とみなされ、売場の評価が下がる。

そのため小売は、需要ではなく“棚を埋めるため”に発注する。

この「棚埋めロジック」が、

**過剰発注 → 売れ残り → 廃棄**

という物質循環を生み出す。

---

##### 2. 小売の廃棄量は“物質の絶対量”として可視化されている

小売が抱える供給過剰は、食品廃棄量という形で最も明確に現れる。

##### ● 小売の食品廃棄量(事業系食品ロス)

環境省の推計によれば、



日本の事業系食品ロスは年間 231 万トン(令和 5 年度)である。

(出典:環境省「我が国の食品ロスの発生量の推計値(令和 5 年度)」

<https://www.env.go.jp/content/000324503.pdf> )

その内訳のうち、

**食品小売業は 48 万トン**を占める。

(出典:消費者庁「2023 年度 食品ロス量推計値」

<https://www.caa.go.jp/notice/entry/042653/> )

48 万トンとは、

**売れ残り・返品・規格外・期限切れ**

という、すべて“供給過剰の結果として発生した物質”である。

小売の供給過剰は、

**棚を埋めるために発注された物質が、棚から溢れ、廃棄に流れる構造**

として可視化される。

---

### 3. 過剰発注の構造——棚埋めロジックは需要を見ていない

小売の発注は、需要予測ではなく、



棚の最大陳列量(フェイス数)によって決まる。

棚割り(シエルフマネジメント)では、

- ・フェイス数
- ・陳列段数
- ・SKU 数

が先に決まり、発注量はその“枠”に合わせて決まる。

棚割りの専門資料でも、棚は

「売場のスペース生産性を最大化するための資源」

として扱われる。

(出典:株式会社ブレインパッド「棚割作成の課題と最新アプローチ」

<https://www.brainpad.co.jp/doors/articles/retail-shelf-dx/> ([brainpad.co.jp](https://www.brainpad.co.jp/) in Bing) )

つまり、

棚を埋めることが目的化し、需要は従属的になる。

この構造が、

売れない商品を“物質として”大量に送り込む

という供給過剰を生む。

---

#### 4. 売れ残り → 値引き → 廃棄という物質の流れ

小売の供給過剰は、次の三段階で物質化する。

##### ● ① 売れ残り

棚埋めのために発注された商品は、需要を超えて店頭に並



ぶ。

● ② 値引き

売れ残りは値引きされるが、値引きは需要を増やすのではなく、

廃棄までの時間を引き延ばすだけである。

● ③ 廃棄

最終的に、期限切れ・品質劣化・棚替えによって廃棄される。

農林水産省の統計では、

食品小売業の食品廃棄物等の年間発生量は 93 万トン(令和 4 年度)

(100t 以上の事業所を含む)

(出典:農林水産省「食品循環資源の再生利用等実態調査」

[https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/zyunkan\\_sigen/](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/zyunkan_sigen/) )

この数字は、

小売が“売るため”ではなく“並べるため”に供給しているという構造を示す。

---

5. 小売の返品構造——“売れない物質”が逆流する

小売では、売れ残りの一部がメーカー・卸に返品される。

返品は、

物質の逆流



であり、物流負荷を増大させる。

返品された商品は、

- ・再出荷されず廃棄
- ・加工原料として再利用
- ・値引き再販

などに回されるが、いずれも

### **供給過剰の後処理**

である。

返品は「需要がなかった」という結果ではなく、  
“過剰に送り込んだ”という供給側の行為の証拠  
である。

---

## **6. 小売の廃棄は“人手不足”を生む影である**

本書では労働問題の詳細は既刊に譲るが、  
物質の流量を見れば構造は明らかだ。

### **● 廃棄のための人手**

売れ残りを値引きし、回収し、廃棄するために人手が必要になる。

### **● 棚替えのための人手**

棚割り変更のたびに、売れ残りを撤去し、新商品を陳列する。

### **● 返品処理のための人手**

返品作業は、物質の逆流を処理するための労働である。



小売の“人手不足”とは、  
供給過剰が生み出した物質の後処理に人手が奪われている状態  
にすぎない。

---

## 7. 小売は供給過剰の典型例である

小売の供給過剰は、  
棚という物質空間を埋めるための発注  
によって生まれる。

その結果として、

- ・売れ残り
- ・値引き
- ・廃棄
- ・返品

という物質の流れが発生する。

食品小売業の廃棄量 48 万トン(食品ロス)

食品小売業の廃棄物等 93 万トン(食品廃棄物全体)

という数字は、

小売が需要ではなく供給を基準に動いている証拠  
である。

小売を語る時、必要なのは理念でも経営論でもない。

必要なのは、

動かしようのない物質の絶対量だけである。



貴方は「コンビニエンスストア 365 日  
24 時間営業が当たり前」だと思います

か？





## 第5章



## ■ 第5章

物流——過剰出荷・過剰返品がつくる“物質の渋滞”

——需要を超えて流れ込む物質が、物流現場を圧迫し続ける構造

---

### 1. 物流は“供給過剰の最終処理場”である

物流は、外食・アパレル・出版・小売のすべての供給過剰が最終的に流れ込む場所である。

需要を超えて生産され、仕入れられ、棚に並べられた物質は、最終的に物流の現場に滞留する。

国土交通省の統計によれば、

国内貨物輸送量は長期的に横ばいであるにもかかわらず、EC 拡大や返品増加により、物流現場の負荷は増大している。

(出典:国土交通省「物流関連データ」

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/transport/> ([mlit.go.jp](https://www.mlit.go.jp/) in Bing) )

つまり、

物量は増えていないのに、処理すべき“手間”だけが増えている

という構造が生まれている。

---



## 2. EC 拡大が生んだ“過剰出荷”という物質の膨張

EC の拡大は、物流に新たな供給過剰をもたらした。

経済産業省の資料では、EC の普及に伴い、

宅配便取扱量は増加傾向にある。

(出典:経済産業省「我が国の物流を取り巻く現状」

<https://www.meti.go.jp/policy/logistics/> )

EC は「とりあえず買う」「とりあえず送る」という購買行動を誘発し、

需要の不確実性を物流に押し付ける構造を生み出した。

その結果、

- ・過剰出荷
- ・過剰梱包
- ・過剰配送

が常態化し、物流現場は“物質の渋滞”に陥る。

---

## 3. 返品物流(リバースロジスティクス)が物質の逆流を生む

返品は、物流における最大の“逆流”である。

GS1 Japan の返品実態調査では、

加工食品の返品率は 0.29%(卸→メーカー)、

日用品の返品率は 1.86%(卸→メーカー)

と報告されている。

(出典:GS1 Japan「2024 年度 返品実態報告」



<https://www.dsri.jp/> )

EC ではさらに高く、

Recustomer の調査では、

**EC 全体の返品率は 6.61% に達する。**

(出典:Recustomer「2023 年度 EC サイトの返品・交換データ調査レポート」

<https://recustomer.me/books/2023-return-reprot> )

返品は、

**出荷 → 配送 → 受取 → 返品申請 → 回収 → 再検品  
→ 再出荷 or 廃棄**

という多段階の物質処理を必要とする。

返品が増えるほど、

**物流は“前に進む物質”と“戻る物質”の両方を処理しなければならぬ。**

これが物流現場を圧迫する最大の要因である。

---

#### **4. 物流現場で起きている“物質の渋滞”**

物流現場では、過剰出荷と過剰返品が重なり、

**物質が滞留し、処理能力を超える現象が起きている。**

newji の分析では、

返品は

・伝票照合



- ・開封
- ・再検品
- ・再梱包
- ・情報登録
- ・廃棄処理

といった多重工程を必要とし、  
通常の出荷作業のキャパシティを奪うと指摘されている。  
(出典:newji「返品が大量発生する裏で物流現場が崩壊している構造」

<https://newji.ai/> )

物流は、  
“売れた物質”よりも“売れなかった物質”の処理に時間を奪われている。

---

## 5. 物流の人手不足は“物質の過剰循環”の影である

国土交通省の統計では、  
トラックドライバー不足は全産業平均の約2倍とされる。  
(出典:国土交通省「物流の現状と課題」

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/transport/> ([mlit.go.jp](https://www.mlit.go.jp/) in Bing) )

だが、これは労働力の問題ではない。  
供給過剰によって生まれた物質の処理量が、物流の処理能力を超えているだけである。



- ・過剰出荷
- ・過剰返品
- ・過剰梱包
- ・過剰在庫移動

これらすべてが物流に押し付けられ、  
“人手不足”という影を生んでいる。

---

## 6. 物流は「供給過剰の最終的な可視化装置」である

物流は、

供給過剰がどれだけ社会に積み上がっているかを最も正確に示す場所である。

- ・出荷量
- ・返品量
- ・再配達率
- ・倉庫滞留量
- ・廃棄物量

これらはすべて、

供給過剰が物質として可視化された指標である。

国土交通省の再配達調査では、

再配達率は約 12%とされる。

(出典:国土交通省「宅配便再配達実態調査」

[https://www.mlit.go.jp/seisakutokatsu/  
\(mlit.go.jp in Bing\)](https://www.mlit.go.jp/seisakutokatsu/(mlit.go.jp%20in%20Bing)) )



再配達とは、  
需要の不確実性を物流が肩代わりしている証拠である。

---

## 7. 本章の結論——物流は供給過剰の“出口”であり“墓場”である

物流は、

供給過剰 → 過剰出荷 → 過剰返品 → 滞留 → 廃棄  
という物質循環の最終地点である。

物流の負荷は、労働問題でも、効率化の問題でもない。

供給過剰という構造そのものが生み出した必然的な結果である。物流を語る時、必要なのは理念でも効率論でもない。必要なのは、動かしようのない物質の絶対量だけである。





後書き



---

## ■ 後書き案

どうして日本だけが供給過剰型人手不足という異常事態が発生してしまうのか？

---

1. 日本の「人手不足」は、世界標準の“人手不足”ではない  
厚生労働省の分析では、日本の人手不足は  
有効求人倍率の上昇・失業率の低下  
という統計上の事実として確認されている。

(出典:厚生労働省「労働経済の分析」

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/187-1.html> ([mhlw.go.jp](https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/187-1.html) in Bing) )

しかし、この「人手不足」は、欧米のように  
需要が強すぎて供給が追いつかない  
という意味ではない。

むしろ日本では、

供給過剰によって生まれた“後処理労働”が膨張し続けている

という、世界でも特異な構造が存在する。

---

2. 日本の労働市場は「ミスマッチが恒常化」している  
内閣府の分析によれば、日本は  
失業率が低いのに、労働移動が極端に起きにくい国



である。

(出典:内閣府「労働移動に係る現状と課題」

[https://www5.cao.go.jp/keizai3/2023/03chapter2\\_2.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai3/2023/03chapter2_2.pdf) ([www5.cao.go.jp](https://www5.cao.go.jp) in Bing) )

- ・失業確率が低い
- ・就業確率も低い
- ・長期失業が発生しやすい
- ・マッチング効率が OECD でも最低水準

つまり日本は、

**「余っている労働力」と「不足している労働力」が同時に存在する」**

という、構造的ミスマッチ国家である。

このミスマッチが、

**供給過剰の後処理に人手が吸い込まれる構造**  
を生み出している。

---

### **3. 日本企業は「需要ではなく供給を基準に動く」**

本書で扱った産業——**外食・アパレル・出版・小売・物流**——

はすべて、

**需要ではなく供給側の都合で物質が動く産業**である。

- ・外食:仕込み過多
- ・アパレル:生産過多
- ・出版:配本過多



- ・小売: 棚埋め発注
- ・物流: 過剰出荷・過剰返品

これらはすべて、

「売れるから作る」のではなく「作るから売る」  
という供給主導の構造で動いている。

その結果、

売れ残り・返品・廃棄という“物質の山”が発生し、  
その後処理に人手が奪われる。

これが日本特有の「供給過剰型人手不足」の正体である。

---

#### 4. 日本の企業文化は「過剰供給を止められない」

現代ビジネスの分析では、日本企業は  
完全雇用に近い状態でも生産性が上がらない  
という特徴を持つ。

(出典: 現代ビジネス「なぜ日本で人手不足が深刻化しているのか」

<https://gendai.media/articles/-/131123>

([gendai.media in Bing](https://gendai.media/articles/-/131123)) )

その背景には、

- ・過剰サービス
- ・過剰品質
- ・過剰在庫
- ・過剰営業時間



といった「過剰」を前提とした企業文化がある。

つまり日本は、

供給過剰を“正常”とみなし、止める仕組みが存在しない社会

なのである。

---

5. 日本の「人手不足論」は、供給過剰を隠すための言説である

Note の分析では、

「人手不足＝供給制約」という議論は誤解を生むと指摘されている。

(出典:Note「人手不足は本当に供給制約か」

<https://note.com/naoki0921/n/nf0e7f6f0e8e7> ([note.com in Bing](https://note.com/naoki0921/n/nf0e7f6f0e8e7)) )

実際には、

- ・業種偏在
- ・ミスマッチ
- ・非正規化
- ・教育投資の不足
- ・労働移動の停滞

といった構造的問題が背景にある。

つまり日本の「人手不足」は、

供給過剰の後処理に人手が奪われているだけ



であり、  
本体である供給過剰を隠すための言説  
として機能している。

---

## 6. なぜ日本だけがこの構造に陥ったのか？

理由は単純である。

### ● ① 需要ではなく「供給側の論理」で社会が動いている

- ・配本制度
- ・棚埋めロジック
- ・過剰サービス文化
- ・過剰品質文化

### ● ② 労働市場が硬直しており、労働移動が起きない (内閣府の分析より)

[https://www5.cao.go.jp/keizai3/2023/03chapter2\\_2.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai3/2023/03chapter2_2.pdf) ([www5.cao.go.jp](https://www5.cao.go.jp) in Bing)

### ● ③ 過剰供給を止める制度が存在しない

- ・返品自由
- ・過剰発注のペナルティなし
- ・過剰生産のコストが現場に押し付けられる

### ● ④ その後処理を“人手”で吸収してきた歴史

- ・外食の廃棄処理
- ・アパレルの在庫処理
- ・出版の返本処理



・小売の値引き・廃棄

・物流の返品処理

これらが積み重なり、

**供給過剰 → 後処理労働の膨張 → 人手不足**

という、日本独特の構造が完成した。

---

## **7. 結論——日本の人手不足は「不足」ではなく「過剰」の結果である**

日本の人手不足は、

**労働力が足りないから起きているのではない。**

供給過剰によって生まれた

**“売れない物質の後処理”が膨張し続けているから**

起きている。

日本だけがこの異常事態に陥った理由は、

**供給過剰を止める仕組みが社会のどこにも存在しないから**  
である。

そして本書は、

**その構造を「物質の絶対量」で可視化する試みである。**

---



---

JP どうして日本だけが供給過剰を“正常”とみなす企業文化を持つのか？

——世界でも特異な「供給過剰の常態化」を生んだ五つの構造

---

1. 日本企業は「内部統合」を最優先する文化を持つため、外部環境より“社内の秩序”が優先される

企業文化研究では、日本企業は

内部統合(Internal Integration)を重視する“強い文化”

を持つとされる。

これは、組織内の価値観の同質性・調和・秩序を優先し、外部環境の変化よりも

「これまでのやり方を続けること」

が正当化される構造である。 [hokusei.repo.nii.ac.jp](http://hokusei.repo.nii.ac.jp)

この文化は、

- ・ 過剰生産
- ・ 過剰在庫
- ・ 過剰サービス
- ・ 過剰品質

といった「供給過剰」を、“変えるべき問題”ではなく“守



るべき慣行”として扱う。

つまり日本企業は、

供給過剰を異常ではなく、組織秩序を保つための正常運転

として扱う文化

を持っている。

---

## 2. バブル崩壊後の「三つの過剰」処理が“供給過剰を前提とした経営”を固定化した

内閣府の分析では、日本企業はバブル崩壊後に

- ・ 過剰雇用
- ・ 過剰設備
- ・ 過剰債務

という「三つの過剰」を抱え、それを長期にわたり処理してきた。[内閣府](#)

この過程で企業は、

「余剰を抱えたまま運営する」ことを前提とした経営体質を形成した。

結果として、

- ・ 過剰な人員
- ・ 過剰な設備
- ・ 過剰な供給能力

を“正常”とみなし、むしろそれを維持することが企業の安定とされた。



これは欧米の「余剰を即座に削減する文化」と真逆である。

---

### 3. 日本の産業構造は「模倣の連鎖」によって供給が爆発的に増える仕組みを持つ

外食産業の例では、繁盛店が出ると

同業者が一斉に模倣し、同質の店が大量に乱立する

という文化がある。

これは「パクリ文化」として指摘されている。[ダイヤモンド・オンライン](#)

この構造は外食に限らず、

- ・ アパレル
- ・ 小売
- ・ 出版
- ・ サービス業

など多くの産業に共通する。

つまり日本は、

需要ではなく“他社がやっているから”供給が増える文化を持つ。

その結果、供給過剰は「自然な現象」として扱われる。

---

### 4. 長時間労働を“美德”とする企業文化が、供給過剰の後処理を正当化してしまう

Note の分析では、日本企業には



「長時間働く＝頑張っている」

という価値観が根強く、業務量の過剰が常態化していると指摘されている。 [Note](#)

この文化は、

- ・ 過剰在庫の処理
- ・ 過剰発注の後始末
- ・ 過剰返品処理
- ・ 過剰サービスの維持

といった“供給過剰の後処理”を、

「努力」「根性」「現場の頑張り」で吸収することを正当化する。

つまり、供給過剰が発生しても、

「現場が頑張ればいい」

という文化がそれを問題化させない。

---

5. 日本企業は「外部環境より内部の慣行を優先する」ため、供給過剰が是正されない

企業文化論の研究では、日本企業は

外部環境への適応よりも、内部の慣行・価値観の維持を優先する

傾向が強いとされる。 [hokusei.repo.nii.ac.jp](http://hokusei.repo.nii.ac.jp)

その結果、

- ・ 返品自由の出版



- ・ 棚埋め発注の小売
- ・ 過剰仕込みの外食
- ・ 過剰生産のアパレル
- ・ 過剰出荷の物流

といった「供給過剰を生む制度」が、制度疲労を起こしても維持され続ける。

なぜなら、

企業を変えることより、企業を守ることのほうが“組織秩序”にとって重要だから。

---

 **結論:**日本だけが供給過剰を“正常”とみなす理由

日本企業は、

外部環境より内部秩序を優先する“強い企業文化”を持ち、その文化が供給過剰を問題ではなく“正常な状態”として扱う構造を作っている。

さらに、

- ・ 模倣の連鎖
- ・ 長時間労働の美德化
- ・ バブル後の余剰処理の歴史
- ・ 供給主導の産業構造

が重なり、

供給過剰が文化的・制度的に固定化された唯一の先進国 になっている。



# 労働教の正体

## ■ コラム

日本企業文化はなぜ“労働宗教”のように振る舞うのか  
——供給過剰を正常化し、後処理労働を正義化する構造

---

### 1. 教義——長時間労働は善、効率化は悪

宗教には教義がある。

日本企業にもある。

- ・ 長く働く者は善
- ・ 早く帰る者は怠惰
- ・ 休む者は裏切り者
- ・ 効率化は“手抜き”
- ・ 生産性向上は“人減らし”

この価値観は合理性ではなく、道徳である。

だから供給過剰が発生しても、

「現場が頑張ればいい」

という“信仰”が優先される。

---

### 2. 儀式——無意味な会議、過剰在庫、過剰サービス

宗教には儀式がある。

日本企業にもある。

- ・ 朝礼



- ・ 会議
- ・ 根回し
- ・ 稟議
- ・ 過剰な仕込み
- ・ 過剰な棚埋め
- ・ 過剰な品質チェック

これらは 成果のためではなく、儀式の継続のために行われる。目的が消え、形式だけが残る。結果として、供給過剰を生む儀式が永続化する。

---

### 3. 共同体——外部より内部の秩序を優先する“閉じた集団”

宗教は共同体を形成する。

日本企業も同じだ。

- ・ 空気
- ・ 和
- ・ 同調圧力
- ・ 先輩後輩
- ・ 終身雇用の残滓

これらは、外部環境より内部の慣行を優先する文化を生む。だから供給過剰が起きても、「外部の需要」ではなく「内部の秩序」が優先される。

---



4. 供給過剰を“正常”とみなす理由は、この三位一体構造にある

壹 教義(長時間労働の美德)

弐 儀式(無意味な業務の継続)

参 共同体(内部秩序の優先)

この三つが揃うと、供給過剰を異常ではなく“正しい状態”として扱う文化が成立する。

- ・ 売れ残っても仕込む
- ・ 売れなくても作る
- ・ 売れなくても配本する
- ・ 売れなくても棚を埋める
- ・ 売れなくても出荷する

これは宗教的行動そのものだ。

---

5. そして“人手不足”という影が生まれる

宗教は教義を疑わない。日本企業も、供給過剰を疑わない。

その結果、

供給過剰 → 後処理労働の膨張 → 人手不足

という構造が生まれる。人手不足は不足ではなく、供給過剰を維持するための儀式労働が増え続けているだけである。

---



6. 本書の役割——宗教の霧を晴らす  
宗教批判ではない。

宗教のように振る舞う企業文化を、  
“物質の絶対量”で暴く行為である。

- ・ 廃棄量
- ・ 返品率
- ・ 滞留在庫
- ・ 過剰出荷
- ・ 過剰仕込み

これらはすべて、

教義・儀式・共同体が生み出した物質の痕跡

である。**余剰外貨問題は別の機会**で扱わせて頂く。

---



---

日本独特供給過剰型人手不足デマゴギー

---

著 者 ミトラウル

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---